方向

第八三号　一九八八年五月二〇日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

孤山雁信

―赤谷明海書翰集―　（二七）

原田憲雄編

★1979.8.7. 原田憲雄宛。手紙。

拝呈　政府の省エネ策に協力してという訳ではありませんが、今夏葉はクーラー使用厳禁の家法を制定。御承知の通り、日当り甚だよろしき構造とて、さすがにこの頃の暑さには閉口しています。

さて陳氏の二行程の記事から火がつき、導火線の趣くところ、必然的に貴兄のところでも誘発が起き、いやはや暑いきなかを御迷惑なことでした。謹んでお詫びいたします。

招提と寺とが唐代の制度の上で使いわけられたかどうかいまだにモヤモヤとしています。『東征伝』の

「私に唐律招提の名を立て後に官額を請ふ…今の唐招提寺是なり」

は陳氏説をとると、理解しやすいように見えますが「唐律招提」という私寺が官額を得て「唐律寺」に変ったわけでもなく、同書の

「時に四方より来って戒律を学ぶ者あれども、供養なきによって多く退還することあり」云々

の招提寺建立の縁由に及ぶ一文がかすんでしまいます。あれから望月氏仏教大年表を繰っていますと、

○北魏武帝始元元年（四二四）、その年の条に

「魏、寺を改めて招提と称す（衡（集古今佛道論衡）一・僧（大宋史略）一）

とあり、また

○隋煬帝大業九年（六一三）その年の条に

「寺院の称を道場と改む（統〈仏祖統紀〉三九）

とありますが、唐代については何もありません。

なお、御教示の『通鑑』の文

「大秦穆護祆僧二千余人」

については、大年表会昌五年八月の条に

「勅して摩尼教徒穆護火祆等二千余人を還俗せしむ（旧唐一八、僧三、統四二）」

とありますので、大秦はローマ帝国よりは波斯国らしく、穆護は人名か、身分か判りませんが、ペルシャ語の音訳のようです。同年表の

○唐太宗貞観五年（六三一）その年の条に

「波斯国穆護何禄、火祆教を伝ふ（叢語〈摩教叢語〉、僧三、統三九）」

と、ここにも穆護が出てきます。

それから、電話で書道史に名高い懐素が、東塔宗の祖である旨を口にしましたが、これは長い間小生が勝手にそう思いこんでいたものの、念のため調べてみましたら同名の別人でした。律宗の懐素の方が百年近く早く生まれています。不明を恥じると共にこれまた謹んで訂正いたします。

昨日、京都市内大驟雨とか。此方には一滴の配給もなく、不公平をカコっていましたところ、今沛然とやってきました。長い間続いた庭の水やりが今日はお休みです。

やがてお盆がやってきます。棚経はやめたというものの広布山も人の出入りが多くなることでしょう。御無理なさらぬよう呉々も御用心を。奥様によろしく。八月三日　赤谷明海　原田憲雄様

〈このあと一九八一年六月中旬までの書翰が見当らない。この年の春頃から原田は『幻の葡萄』の編集を始めた。それにかかわる葉書が六月下旬に二通ある。十月二十八日、私は赤谷君を訪問し、同書二七四頁までの試し刷りの査閲を乞うた。十一月四日、試し刷りに詳細な付箋で文字の誤りを正し、日記と照合して事実の欠けた所を教えられた。以後同書第五巻完了まで引き続き手紙や葉書で教示を蒙る。教えはすべて同書中に収めてあるのでここには繰り返さないが、添えられた書翰はかかげることにする〉

★1981.6.22.同宛・葉書・墨書・

異国美人は縷紅草或は留紅草なりと教えくれし人あり　留紅草については和漢三才図会に次の如く出ています。「俗称本字未詳、按留紅草細茎靭葉細密如杉藻、而表裏淡青色茎端出蔓八月枝叉抽短茎開花形如丁子様而紅色長六七分可愛、花能結角中有細子」図示の葉は持参したものと少異、持参のものは羽衣留紅草（モミジバルコウソウ）のようです。

★1981/6.25.同宛・葉書・

異国美人続報・竹内不成君から来信、かすかな記憶ながら・父存命中、誰か知人から種子を貰って育てていたも

の、自分が命名したのではない、と。念のため昔のはがきを捜し出したところ、昭和十六年八月二十二日消印で彼の写生図に添えて「異国美人という花」と明記されています、これで異国美人は留紅草の俗称に間違いなきそうです。日本国語大辞典（小学館）には俗称「カボチャノヒルガオ」とありますがどうも味がなさすぎます。尚、モミジバルコウソウは英名カーディナル・クライマー、米スロッター氏が人工交配で作り出したものとか。ところで故〈北川智海〉長老の〈悉曇の〉筆跡を表装して恵与とか。それは過分と筆の主からも叱られそうですので経費は此方で負担します。折角の御好意ながら表具師への斡旋だけにして下さい。

★1981.7.22.同宛。葉書。

昨日は炎暑の中態々お越しいただき剰え何よりの重宝〈前便に見える北川長老の書軸〉を御恵与賜り有難う存じます、なけなしの知識をもとに謎ときよろしくニラメッコしましたところ

南無釈迦牟尼仏陀

であろうというところまで到りつきました。妙徳寺に相応しいもの、小生が死んだら持って帰って下さい、それまでに箱書もちゃんとしておきます。時節柄くれぐれも御自愛の程を。二十二日

★1981.10.31.同宛。葉書。

艸三号並びにファイル二冊到来、頂戴します。ファイルは中味五十枚もあるので役立ちそうです。君からの書簡類の返るのを待って試しに整理してみます。幻の葡萄〈の点検〉、やっと一〇〇頁に到ったところです。何分厖大なもの、回転のおそい機械に油をさして珍しく努めているのですが、ハカがいきません。それに急ぎ読みあげ

ねばならぬ本が重なってきましたので。今までのところ年時は確か、誤植はなし、小生の容喙する余地はありません、ただ往時を憶い何やかやと感懐を催しているだけです。出来るだけ早く読み了えてお届けします。

★1981.11.3.同宛。『幻の葡萄』第一巻についてのメモ。

うかつなことながら校正刷のつもりで、参考になればと付箋張りをしました、それも千美さんの遺稿集という本旨を忘れてくだらぬ事どもを。

歴史的記録は的確で小生の日記より信頼がおけます。タイプ打ちも正確、誤植は殆どありません、正誤表を出すのでしたら一四五頁の法金剛院の禄高だけ訂正しておいて下さい

既に消えてしまっていた風景がまざまざと再び眼前に。あの頃をいとおしんでいます。続編を期待します。十一月三日。明海より。　原田憲雄様

★1981.11.19.同宛。『幻の葡萄』メモ。

★1981.12.15.同宛。葉書。墨書。

幻の葡萄　三九二頁分までと後記を落掌、庭の掃除をやめて読んでいます、参考にして頂く積りで送った小生の日記等そのまま活字になっているので面はゆい思いです　慶さんも道子さんもやがて学校が休み、皆でゆっくりよい正月をお迎え下さい　十五日

★1982.3.12.同宛。葉書。

軍隊手帳の中に昭和十九年十一月四日附十三日受の君のはがきを写してあるとは昨日申し上げた通り。それ以外

にも十月二十一日附三十一日受のはがきも写していました。一艸舎関係では他に森田〈曠平〉、〈大塚五郎〉先生、のも写しています。宮崎〈篤三郎〉、北浦〈良子〉、高田〈平二郎〉氏からも受けていますが、内容を転記していません。右お知らせまで　三月十一日

★1982.6.7. 同宛・手紙・

四日には態々の御来臨、御足労をおかけしました。御教示により・その日松尾〈栄次郎〉氏に〈資料集製本の〉礼状を認め・『平安学園と私』は本日発送しました。

「太古事記」は昭和十四年正月に写していますが、字数が五五六字もあるので、〈書道展作品の〉軸表装に適するような大きさ（全紙大）にうまくはめこめられるか自信がありません。とにかく試みてみます。

記文中、不明の字が二字あります。写誤かもしれませんが存じよりのところをお洩らし下さい。

(1) 待賢門院嘉新此院日帝屢行幸故諸臣等聚住
木性石設假山蓮池而改其興趣。

(2) 従其林陰緬視則東寺浮図高揮雲漢男山在前
生動擁後

この文は筆跡から小生は慧晃師の作と断定してきましたが、師のものとすると文中の「元禄乙亥（八年）により四十才の時のもの・既に元禄六年に住持職をついでいるので矛盾がありませんが、師僧の円巌玉周も存命中で六十三才です・玉周か慧晃かいずれかの作でしょうが、筆跡以外に決め手を欠いています・今一度現物に当たってとくと見定めておくべきでしょうが、法金剛院行きも億劫です・で、とりあえず、あと書きに「…撰文なるべし」とすることにしました・先般も申しあげた通り、漢文で添えたいと思いますので、末尾に記しましたような意味のぶんを漢文で整えて下さい・できるだけ短文でお願いします・六月七日　明海　原田憲雄様

（此）
右記は法金剛院慧晃律師の撰文なるべし。（にかかるもの）
南無現に在すれども風化して判読に堪えざらんことを慨る。仍て今茲に、次て後世の参考に資するものなり。（後に生ずるものなり）
時に元禄五十七年夏孟山書

大涅槃像と猫

1988.4.15.

原田　慶
カット・原田道子

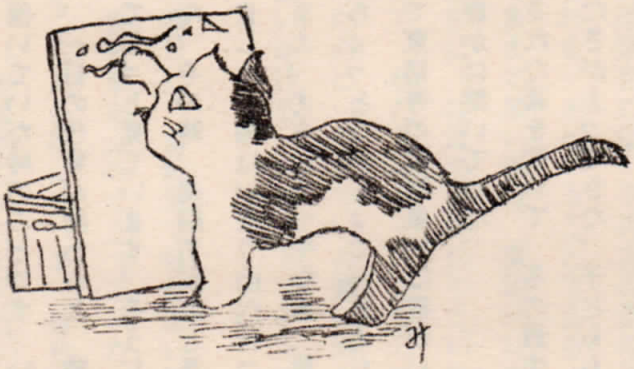
一昨年の三月十五日、涅槃会は冷たい雨の日だった。京都の寺々は古都税に反対して、拝観停止の時だったので、泉涌寺も東福寺もお参りの人が少なく、私が泉涌寺から歩いて、東福寺へ行くと、山内の保育園児が保母さんに連れられて、みんなでお参りに来ていた。

大きな本堂の中には、他に一般の人はほとんど見えなくて、園児たちに向かって、お坊さんの話が始まるところだった。私も後ろに座って一諸に聞いていた。

「こんにちは、みなさんよくお参りに来られました。今日はお釈迦様が亡くなった日で、東福寺では毎年この三月十五日に法要をいとなんでおります。ここにかけてあります大きな絵は、お釈迦様が亡くなって、たくさんの人や動物たちが悲しんでいる様子を描いたものです。お釈迦様が亡くなって涅槃にお入りになったというのでこのようなお姿を涅槃像と言いますが、この大きな絵は畳が六十四枚も敷けるほど大きいのです。まんなかで樹の間に横になってやすんでおられるようにみえるのがお釈迦様です。まわりの人たちはかなしんで、泣いている人もありますね。下のほうには動物もたくさんいます。このような涅槃像のなかには、猫はいないことが多いのですが、この東福寺の涅槃像には、猫がいるのでめずらしいと言われています。

どうして涅槃像には猫がいないかといいますと、それにはこんなお話があるのです。お釈迦さまがひどい病気で、おなかが痛くてなかなかなおりませんでした。お釈迦様のお母さんが、心配なさって、鳥に薬を持たせて、

お釈迦様のところへ届けさせられました。その薬を飲んだら病気がなるのです。鳥が飛んできて、薬の入った袋をお釈迦様の方へ落としました。ところが、その袋が木の枝にひっかかってしまったのです。早く薬をあげないと間にあいません。木に登るのが上手なものが、取りに行こうとした時に、猫が横からぱっと飛び出して、じゃまをしたので、袋を取りに行くのが遅くなってしまいました。それで、薬が間にあわなくてお釈迦様は、とうとう亡くなってしまったのです。



猫はみんなからおこられました。それでどこのお寺の涅槃像にも、猫はいないのですではなぜ東福寺の涅槃像には猫がいるのでしょうか。この絵は、東福寺の昔の坊さんで、兆殿司と言う人が描かれたのですが、その坊さんは

大変絵が上手で、自分の使う絵具を、いなり山の毘沙門谷の粘土を掘って作っていましたので、他の人とちがう色を出すこともできました。

兆殿司がこの涅槃像を描いていた時のことです。いつでも猫が一匹、どこからかやってきて絵を描いているのをじっと見ているのです。一日の仕事が終わると、猫もどこかへ帰って行きます。不思議な猫やなあと思っていると、あくる朝はまた来てじっと見ています。そうして、もうおおかた絵が出来上がったころ、黄色の絵具がたらんようになってきました。その時、兆殿司がふと見ると、猫がいません。しばらくして帰ってきた猫は、黄色い絵具の土をくわえていました。猫はいなり山へ行って、粘土をとってきたのです。

兆殿司は感心して、おまえ、えらいやつやなあ、黄色が足らんと思つて、とりに行ってくれたのか、そんならまあせっかくやさかい、ちょっとないしょでおまえも描いといてやろか、と言うて、象の足の前に小さく描いてやらはったのです。それで東福寺の涅槃像には猫がいるのです。」

子どもたちは、じっと静かに聞いていた。

強い風が、張りめぐらされた幕を吹いて、冬の最中のように冷たい本堂だった。私は厚いコートを着ていても寒くて、御座の下から冷たさが上ってきた。子どもも保母さんも、大変にうす着であった。皆でいっしょに合掌すると、お坊さんから、あとでみんなにお供えのあられをあげましょう、と約束してもらい、坊さんの前で順に一人ずつ「ありがとう」と言って帰って行った。

保育園の子どもは、小学生のように手をあげて、「しつもん！」などと言わない。寒いとも言わず、靴をはくの

に押し合いもせず、順番にさっさと雨風の中へ出ていった。小さい子どもは、どうしてあんなに我慢できるのだろうか。

たしかに、東福寺の大涅槃像には、下の方の象の足もとに、白と黄色の猫がいる。そして、〃古よりこの猫は魔除の守護ありと伝へられる。〃ということである。

私も子どもの頃、足の裏まで黒い猫は、魔除けになると聞いたことがある。祖母の家にまっ黒の猫がいて、妹と二人で遊びに行つたときに、祖母の大事にしていた若鶏を、あやまって逃がし、この黒猫に取られてしまった祖母がひどく憤慨したので、私たちはおそれをなして、祖母の出掛けたすきに、家へ逃げかえったことがある。田舎では、ネズミを防ぐために、たいていの家に猫がいた。彼等は、ネズミばかりでなくバッタでもカエルでも動くものならなんでも追いかけて、キャットフードなどというものは欲しがらずに、ちゃんと猫らしく生きていた。

先日、私が田舎からの帰りに、自転車で私を追い越していった少女が、堤防を越えて坂を下り、バス停のすぐそばの小川の橋の上で、自転車を止めて立っていた。私が近くまで行ってふと気がつくと、自動車道路の川寄りの端に、大きなとら猫がころんと横になって、金色の目をいっぱいに開き、じっと動かないでいる。毛並みもつやつやとふくらんでいて、「かまわないでください、ひなたぼっこをしているのです。」とでも言うように、すました顔をしていた。

こんなに自動車のびゅんびゅん走る道路で、ひなたぼっこをする猫があるだろうか。私はしばらく眺ていたが

そのまま道を横ぎってバス停の方へ歩いて行った。振り返ると、自転車の少女は、なんとも困りはてた様子で猫を見たり走り過ぎる自動車をみたり、落ち着かないようすをしている。やはりあの猫は、倒れていたのだろうかそれで通りかかった少女は、見すごせなくて、猫のそばで立往生しているのだろう。猫は赤い皮の首輪をしていた。少女はあの猫を知っているのかもしれない。

私はバスの停留所に立ったまま、少女の様子をじっと見ていた。突然、ガタンとスタンドをおろすと、自転車をもときた方向にまわして、少女は小走りに、堤防の坂を上りはじめた。しかし坂の途中でまたスタンドを立てて自転車を止め、前かごの中の手さげカバンを出して、後ろの荷台に置くと、かごを空にして猫の所へ引き返してきた。前かごに猫を入れるつもりらしい。少女は猫のそばに立って、なおためらうように、スカートの脇に両手をこすりつけるような動作をしてから、思い切って猫を抱きあげた。抱くというのではなくて、前足を両手で持って、吊りさげるようにして、自転車の方へ歩いていった。でも大きな猫をかごまでは持ちあげられなかったようで、そばの草の上に猫を寝かせると、もう一度、水色のスカートの両脇で、手をこすりつけるようにしてはらい、手さげを前かごにもどして、大急ぎで自転車を押すと、土手を上がって堤防の向うへ消えていった。

少女は、猫の飼い主に知らせに行ったのだろうか、誰か大人の応援を頼みに行ったのだろうか。早く誰か来てくれないかなあと思いながら、私は堤防の上を見上げていた。

猫は飼い主に、自分の死を見せないともいわれるが、猫も死に場所がなくなってきたのだろうか、それとも死ぬつもりはなかったのに、突然なにか事故にあったのだろうか。バスが来たので、それから後のことはわからな

いが、きっと誰かが、猫をつれに来たにちがいないと信じて、私はその風景を忘れることにした。

涅槃会もまたお参りが多くなって、昨年は一昨年より、今年は昨年よりにぎやかだった。東福寺では、涅槃像の下に近寄って、猫をさがしている人があるが、大きな図の中から、説明なしで、猫をさがし出すことはむつかしい。本堂で売られている縮図や、絵はがきを買って、位置の見当をつけてから見ると、それらしい姿が見える美しくおっとりした猫である。

東京の護国寺にも、猫マンダラといわれて、猫のいる涅槃像があるというが、それでは、護国寺の方の猫は、どういうわけで、涅槃像に描いてもらうことになったのだろうか。涅槃像の中には、それほど多くの種類の動物が描かれているわけではないので、いないものよりいる動物に、なにか特別の意味があるように考えるのである昨年の涅槃会には、泉涌寺と東福寺へ友達と行き、今年は私の母と行った。来年も行こうと言っていた友達は、病気で入院したので行けなかった。母は、足の痛いのを、腕をかかえるようにして行ったが、やはり、来年もまたもし生きていたら、連れて行ってほしいと言った。今年の涅槃会も、時々雨の通りすぎる冷たい日だった。

※前号正誤　二〇頁一六行　まのあたたり　→　まのあたり　二一頁一四行　unnamati　→　unnamayil　仝
digavamanati　→　dig avamanati　(avamanati は底本のローマ字本に従ったが、avanamatiではなかろうか)

弥勒の疑問　―法華経巡礼　15―

1988.5.10.　原田憲雄

1-23. そのとき弥勒ボサツ大士は思った。偉大な前兆と奇蹟が、ああ、如来によって現わされた。いかなる因いかなる縁によるのであろうか、世尊がこのように大きな前兆を示し奇蹟を現わされたのは。世尊は三昧に入られた。そしてこのように驚くべき不思議な奇蹟が現わされた。一体これは何なのか。わたしは尋ねただしたい、このわけを説明できるのは誰かと。

atha khalu maitreyasya bodhisattvasya mahāsattvasyaitad abhūt / mahānimittaṃ prātihāryaṃ
batedaṃ tathāgatena kṛtaṃ / ko nu atra hetur bhaviṣyati kiṃ kāraṇaṃ yad bhagavatedaṃ evaṃ-
rūpaṃ mahānimittaṃ prātihāryaṃ kṛtaṃ / bhagavāṃś ca samādhiṃ samāpannaḥ / imāni caivaṃrūpāṇi
mahāścaryādbhutā cintyāni mahardhi-prātihāryāṇi saṃdṛśyante sma / kiṃ nu khalv ahaṃ etaṃ
arthaṃ paripraṣṭavyaṃ paripṛccheyaṃ / ko nv atra samarthaḥ syād etaṃ arthaṃ visarjayituṃ /

弥勒は、パーリ語で metteya サンスクリット語で maitreya で、ともに、情深い、の意。『賢愚経』によれば、ベナレスのバラモンの家にうまれ、仏門にはいった。釈尊が、八万四千年後に弥勒という如来がシャバ世界に出現し衆生を済度すると語るのを聞き、自分がその如来になろうと決意し、釈尊から許されたという。異伝も多いが、釈尊に次ぐシャバ世界の教主と仰がれる点では共通する。『法華経』ではアジタとも呼ばれる。

1-24. またこう思った。この麗しい文殊少年は、過去の世にジナに従い、善根を植え、多くの仏に親しんだ。文殊少年は過去の世でももろもろの如来・供養されるべき方・正しく悟った人がこのような前兆を示されるのをみたことだろう。過去の大法についての話し合いも経験したことであろう。だから今わたしは

文殊少年に、この訳を聞いてみよう。

tasyaitad abhūt / ayaṃ mañjuśrīḥ kumārabhūtaḥ pūrva-jina-kṛtādhikāro' varopita-kuśalamūlo bahu-buddha-paryupāsitaḥ / dṛṣṭa-pūrvāṇi cānena mañjuśriyā kumārabhūtena pūrvakāṇāṃ tathāgatānāṃ arhatāṃ samyaksaṃbuddhānāṃ evaṃrūpāṇi nimittāni bhaviṣyanti / anubhūtapūrvāṇi ca mahādharma-saṃkathyāni / yan nv ahaṃ mañjuśriyaṃ kumārabhūtaṃ etam arthaṃ paripṛccheyaṃ //

文殊は、パーリ仏典には見えない。mañjuśrī を文殊師利、文殊尸利、曼殊室利などと音写し、略して文殊、濡首、溥首などとし、妙吉祥、妙徳などと意訳する。mañju は愛すべき、麗しい、の意で、śrī は光輝、幸運、の意だからである。kumārabhūta(少年)を加え、法王子、童子、童真などと訳す。

二世紀の中頃に翻訳された『道行般若経』に、弥勒とともにその名がみえ、漢訳経典に現れる最も早い例だが、名がみえるだけで弥勒のようには活躍せず、この経の原典である『八千頌般若経』の現存梵本には全く見えない。しかし、般若系経典と縁りが深い、純然たる大乗のボサツである。『文殊師利般涅槃経』によれば、コーサラ国の首都シュラーヴァスティーの近郊ターラ聚落のバラモンの子で、幼い頃から智慧にすぐれ、仙人たちを歴訪した後、仏門に入った。釈尊滅後ヒマラヤ山に入り、五百人の仙人のために仏の教えを述べたという。『華厳経』では善財童子に南方に遊行することを勧めるボサツとして知られる。常に童形で、少年の純真と積極を体現する。『法華経』従地涌出品では、若者が、老人を指して「これはわが子だ」という譬喩が出て来て、この若者に文殊少年ボサツの面影が映っている。

妙本は「少年」を「法王子」と訳する。前後の文脈を踏まえた意訳ですばらしいが、今日の訳語としては「少年」でいいだろう。少年の記憶に沈んでいる「過去」を聞くという発想はすばらしい。民俗学や文化人類学は、いま流行の新しい学問だが、いわば人類の「少年」の深層意識にものを尋ねる方法で、文殊ににむかってする弥勒の問いの現代版といってよいのではないか。なおジナは勝者の意で、ヴィシュヌ神の称だったが、仏教では仏を、ジャイナ教では修行を完成した聖者を指す。

1-25. またビク、ビク尼、信者、女信者の四衆、多くの天、竜、ヤクシャ、ガンダルヴァ、アスラ、ガルダ、キンナラ、マホーラガと、人と人ならぬものも、このような世尊の偉大な前兆と奇蹟を見て、奇異、未曾有、好奇の思いがしてこう考えた。「わたしたちは今、世尊がこのような神力により奇蹟の光を現わされたのはなぜなのかを、たずねよう」

tāsāṃ catasṛṇāṃ parṣadāṃ bhikṣu-bhikṣuṇy-upāsakopāsikānāṃ bahūnāṃ ca deva-nāga-yakṣa-gandharvāsura-garuḍa-kiṃnara-mahoraga-manuṣyā-manuṣyāṇāṃ imaṃ evaṃrūpaṃ bhagavato mahā-nimittaṃ prātihāryāvabhāsaṃ dṛṣṭvāścarya-prāptānāṃ adbhuta-prāptānāṃ kautūhala-prāptānāṃ etad abhavat/ kiṃ nu khalu vayaṃ imaṃ evaṃrūpaṃ bhagavato mahardhi-prātihāryāvabhāsaṃ kṛtaṃ paripṛcchema //

妙本は、「ヤクシャ」以下「人ならぬもの」までを「鬼神等」とし、岩本裕氏は「八部神衆をはじめ人間や鬼霊たち」とする。

1-26. そのとき弥勒ボサツ大士は、瞬時にそれらの四衆の心にひらめいた思いを知り、自分も法についてのかかわりから麗しい文殊少年にこのように問うた「どのような因、どのような縁によるのだろうか、麗しい文殊よ、このように世尊が不思議な奇蹟を現わし神力を示されたのは。この一万八千の仏国土が多彩で美しく、こよなく麗しく、如来を上首とし如来を導師としているのが見えるのは。

atha khalu maitreyo bodhisattvo mahāsattvas tasminn eva kṣaṇalavamuhūrte(na) tāsāṃ catasṛnāṃ parṣadāṃ cetasaiva cetaḥ-parivitarkaṃ ājñāyātmanā ca dharmasaṃśayaprāptas tasyāṃ velāyaṃ mañjuśriyāṃ kumārabhūtaṃ etadavocat / ko nv atra mañjuśrīḥ hetuḥ kaḥ pratyayo yad ayaṃ evaṃ-rūpa āścaryābhuto bhagavata ṛddhyavabhāsaḥ kṛta imāni cāṣṭādaśa- buddhakṣetra-sahasrāṇi vicitrāṇi darśanīyāni parama-darśanīyāni tathāgata-pūrvaṃgamāni tathāgata-pariṇāyakāni saṃ-dṛśyante //

会衆の疑問を知って、かれらに代って問う。それがここでの弥勒の役割だ。かれは、後の文殊の説明で怠け者だった前身が披露され、滑稽な人物のように見えるが、ピエロは滑稽ではあってもドラマの舞台を回す重要な人物である。仏弟子のうちではシャーリプトラが同じ役割を進んで果たす。瞬時に大衆の心のひらめきを知る、そういうピエロは、けっしてばかにはできぬ。

1-27. さて弥勒ボサツ大士は麗しい文殊少年に詩で語りかけた。

atha khalu maitreyo bodhisattvo mahāsattvo mañjuśriyaṃ kumārabhūtaṃ ābhir gāthābhir adhy-

abhāṣata //

「詩」は、漢訳経典では「偈」とか、「頌」と訳されることが多い。一般的にいって、仏教の経典では、詩と散文からなるものは、詩の部分が古く、散文の部分は、詩を説明したり補足するために新たに加えられたものだといわれる。『法華経』も大体はそうみてよいが、例外もあり、さまざまに論議されている。とにかく散文と詩とは内容では重複するものが多い。しかし、散文になく、詩にのみあって、大切なところもあるので、わたしとしては省かずに読んでゆきたい。

1-28. なぜに、文殊よ、こんな光が放たれたのか、人間の導師によつて。

眉間にひそむ巻き毛から、ひとすじの光線をきらめかせ。（1）

マンダーラヴァやマンジューシャカの花の大雨ふりそそぎ、

神々はよろこんで、心ほのめくチャンダナの天の抹香まき散らす。（2）

大地あまねく照り輝き、四衆ことごとく歓喜して、

いっさい国土すきまじく、六とおりに振動する。（3）

さてその光りは、東方の、万八千の国土に満ち、

それぞれの国土は、一瞬、金色に輝きわたった。（4）

kiṃ kāraṇaṃ mañjuśrī iyaṃ hi raśmiḥ pramuktā naranāyakena /

prabhāsayantī bhramukāntarātu ūrṇāya kośād iyaṃ ekaraśmiḥ //1//

māndāravāpāṃ ca mahānta-varṣaṃ puṣpāṇi muñcanti surāḥ suhṛṣṭāḥ /
mañjūṣakāṃś candana-cūrṇa-miśrān divyā sugandhāṃś ca manoramāṃś ca //2//
yehi mahī śobhati yaṃ samantāt parṣāś ca catvāra sulabdha- harṣāḥ /
sarvaṃ ca kṣetraṃ imu saṃprakampitaṃ ṣaḍbhir vikārehi subhīṣma-rūpaṃ//3//
sā caiva raśmī purimā-diśāya aṣṭādaśa-kṣetra-sahasra-pūrṇāḥ /
avabhāsayī ekakṣanena sarve suvarṇavarṇā iva bhonti kṣetrāḥ //4//

これを妙本は四字二十句で次のように訳す。

文殊師利。導師何故。眉間白毫。大光普照。雨曼陀羅。曼殊沙華。栴檀香風。悦可衆心。以是因縁。地皆厳浄。而此世界。六種震動。時四部衆。咸皆歓喜。身意快然。得未曾有。眉間光明。照于東方。万八千土。皆如金色。

簡潔で美しく、感嘆せざるをえない。正本は四字三十四句、これも決して拙いとはいえず、現に妙本の「悦可衆心」「厳浄」などは、正本の訳語をそのまま踏襲しているのである。しかし全般にごたごたした感じで、妙本が出れば読まれなくなるのは当然だろう。妙本は、梵本より文章として立派だとは、すでに言われていることだが、自分で読んでみるとなるほどと納得する。それなら既に専門学者の訳文が幾通りも出ている梵文を、なぜ素人のおまえが下手くそな訳文を作りながら読むのかという疑問が出てくる。他人のためには無用かもしれぬが、自分のためには無用ではなく、『法華経』そのものが讀誦、解説、書写を法華行と教えているのだから、愚かで

なすところのないわたしにでも許された行ということになろうか。

1-29. 阿鼻地獄から有頂天まで、もろもろの国土に衆生がいて、
六道をたどりつつ、そこに生れ、そこに死ぬ。（5）
いろいろの行為、さまざまの報い、幸、不幸、
優、劣、中間、あらゆるものがみな見える、ここに立ったら。（6）
また見える、仏たちが法を説き、獅子王が修行して、
無量千万の衆生を教え、微妙の言葉で宣べるのが。（7）
おのおのの国土でも、幾億の譬喩、幾千万の論証で、
仏の法を説き明かす、声ふかふかと、めでたく希有に。（8）

yāvān avīcī paramaṃ bhavāgraṃ kṣetreṣu yāvanti ca teṣu sattvāḥ /
ṣaṭsū gatiṣū tahi vidyāmānāḥ cyavanti ye cāpy upapadya tatra //5//
karmāṇi citrā vividhāni teṣāṃ gatiṣu dṛśyanti sukhā dukhā ca /
hīnāḥ praṇītā tatha madhyamāś ca iha sthito addaśi sarvaṃ etat //6//
buddhāṃś ca paśyāmi narendrasiṃhān prakāśayanto vicaranti dharmaṃ /
praśāsamānān bahu -sattva-koṭīḥ udāharanto madhurasvarāṃ giraṃ //7//
gambhīra nirghoṣam udāraṃ adbhutaṃ muñcanti kṣetreṣu svakasvakeṣu /

dṛṣṭānta-hetu-nayutāna koṭibhiḥ prakāsayantān imu buddhadharmam //8//

梵文の詩の一シュローカ二行を、妙本は四句十六字で訳してきたが、第八シュローカでは、

其声清浄。出柔軟音。教諸菩薩。無数億万。梵音深妙。令人楽聞。各於世界。講説正法。種種因縁。以無量喩。照明仏法。開悟衆生。

と、十二句四十八字で訳している。現存梵本のどのテキストも、ここは一シュローカの長さ。妙本の底本が見出されない限り、断定はできないが、クマーラジーヴァの信仰と歓喜がこのシュローカから溢れて、長大な訳文となったのではないだろうか。

1-30. 苦しみに会い、生誕と老年に厭き厭きしている無知な衆生に、

静かな寂滅を開示する、ビクたちよ、これが苦の終りだ、と。（９）

仏に供養し、福徳そなえ、すぐれた力を得た人々には、

独覚の立場をかたる、法眼をほめたたえ。（１０）

無上の智慧をもとめてやまず、どんな時でも

修行するスガタの子らには、正しい覚りを讃嘆する。（１１）

わたしは聞き、わたしは見る、声よき文殊よ、このようにここに立ち、

幾千億の殊勝のことを。ものがたるのは、ほん少しだが。（１２）

duḥkhena saṃpīḍita ye ca sattvā jāti -jarā-khinna-manā ajñānakāḥ /

teṣāṃ prakāśanti praśānta-nirvṛtiṃ duḥkhasya anto ayu bhikṣaveti //9//

udāra-sthāmābhigatāś ca ye naraḥ puṇyair upetās tatha buddhadarśanaiḥ /

pratyekayānaṃ ca vadanti teṣāṃ saṃvarṇayanto ima dharmanetriṃ //10//,

ye cāpi anye sugatasya putrā anuttarāṃ jñāna gaveṣamāṇāḥ /

vividhāṃ kryāṃ kurviṣu sarvakālaṃ teṣāṃ pi bodhiya vadanti varṇaṃ //11//

śṛṇomi paśyāmi ca mañjughoṣa iha sthito idṛśakāni tatra /

anye viśeṣeṇa sahasra-koṭyaḥ pradeśa-mātraṃ tu hi varṇayiṣye //12//

ここでは仏の教えが対象によつて差異のあることを示し、（９）は声聞、（１０）は独覚、（１１）はボサツへのものである。スガタとは、よくゆきし人、覚りに到達した人、の意で、善逝と漢訳し、仏の十号の一つ。声よき文殊は、マンジュゴーシャの私訳。ゴーシャは鳴り響く声だが、妙音、妙声などと漢訳される。

1-21. わたしは見る、諸国土にガンジス河の砂の数よりあまたのボサツがいて、

幾千万のその人々が、さまざまに精進し、覚りをひらく。（１３）

あるひとびとは、布施として、財、宝、金、銀、

真珠、摩尼珠、巻貝、瑪瑙、珊瑚など、奴婢、馬車、羊車、（１４）

宝で飾った輿などを、歓喜して寄進する、

無上道に回向して、この乗物を手に入れようと。（１５）

三界の最高無比の乗物は、スガタたちの讃嘆する佛乗であり、
それを早く頂きたいので、このように捧げるのです、と。（１６）
あるひとびとは、四頭の馬でひく車を、欄干や花の旗で飾り、
宝玉作りののぼりをつけて、寄進する。（１７）
あるひとびとは、息子や娘、さては妻、おのれの肉、
手さえ、足さえ、布施とする、無上道を求めるために。（１８）
あるひとは頭、あるひとは目、あるひとはおのれの体を捧げ、
まごころこめ、如来の智慧を、希求する。（１９）
わたしは見る、麗しい文殊よ、あるひとびとは、栄えた国を捨て去って、
後宮も、領土も、家臣も、親族も、いっさい手離し、（２０）
導師のもとに参詣し、最上の法を尋ねようと、
土色の衣を着け、髪や、髭を、剃り落とすのを。（２１）

paśyāmi kṣetreṣu bahūṣu cāpi ye bodhisattvā yatha gaṅgavālikāḥ /
koṭi-sahasrāṇi analpakāni vividhena vīryeṇa janenti bodhiṃ //13//
dadanti dānāni tathaiva kecid dhanaṃ hiraṇiyaṃ rajataṃ suvarṇaṃ /
muktā-maṇiṃ śaṅkha-śilā-pravāḍaṃ dāsāṃś ca dāsī ratha-aśva-eḍakān //14//

śivikās tathā ratna-vibhūṣitāś ca dadanti dānāni prahṛṣṭa-mānasāḥ /
pariṇāmayanto iha agrabodhau vayaṃ hi yānasya bhavema lābhinaḥ //15//
traidhātuke śreṣṭha-viśiṣṭa-yānaṃ yad buddhayānaṃ sugatehi varṇitaṃ, /
ahaṃ pi tasyo bhavi kṣipra lābhī dadanti dānāni im īdṛśāni //16//
catur-hayair yukta-rathaṃś ca kecit savedikan puṣpadhvajair alaṅkṛtān /
savaijayantān ratanāmayāni dadanti dānāni tathaiva kecit //17//
dadanti putrāṃś ca tathaiva putrīḥ priyani māṃsāni dadanti kecit /
hastāṃś ca pādāṃś ca dadanti yācithāḥ paryeṣamāṇā imam agrabodhim //18//
śirāṃsi kecin nayanāni kecid dadanti kecit pravarātmabhāvān /
dattva ca dādāni prasanna -cittāḥ prārthenti jñānaṃ hi tathāgatānāṃ //19//
paśyāmi ahaṃ mañjuśirī kahiṃcit sphītāni rājyāni visarjayitvā /
antaḥpurān dvīpa tathaiva sarvān amātya-jñātiṃś ca vihāya sarvān //20//
upasaṃkramī lokavināyakeṣu prcchanti dharmaṃ pravaraṃ śivāya /
kāsāya-vastrāṇi ca prāvaranti keśaṃś ca śmaśrūṇy avātarayanti //21//

布施のなかに、奴婢、妻子、などの人身が含まれるのは、昔のことであっても厭わしいが、習慣としてあったのだろうか。巻貝は、宝物として珍重される特殊なもので、これにつき弟原田禹雄が先に論文を書いている。